

## 会津藩降伏と秋月悌次郎

中西達治

一

大政奉還をして、諸侯と共に新政府入りを果たそうとしていた旧幕府の最高責任者である徳川慶喜は、穏やかな政権委譲を考えていた。新政権の中で、徳川慶喜は主要なメンバーのひとりとなる。薩摩と長州、そして一部の公家政治家は、それではおさまらず、急進的な武力制圧路線を強硬に推進しようとしていた。江戸表から届いた、江戸城放火など、騒擾事件の主犯が薩摩藩だったということを知った慶喜が、薩摩藩の不法を訴えるために上洛しようとした進路を遮り、薩摩藩の発砲に始まった鳥羽伏見の戦いは、強硬派にとつて願ってもない事件だった。だが徳川慶喜に交戦する意志はなかった。彼は一方的に主戦派の松平容保、松平定敬を引き連れて江戸に引き揚げてしまった。逆に薩摩、長州両藩の過激派は、朝廷の權威をかさに、一気に軍事的攻撃を進めた。戦いが始まるまで、諸藩は新政府がどういう形で国内統治に乗り出すのかわからないまま、事態の推移を見ていた。ところが、鳥羽伏見の戦いで新政府側が、旧幕府関係者を「賊軍」としたこと、諸藩の対応が微妙に変わり始めた。中国地方の佐幕派諸藩は次々に帰順、四国の高松藩、松山藩も土佐藩が中心となって進軍降伏させ、中国、四国、九州諸藩をほぼ抑えることに成功する。一方江戸、関東一円から東北地方にかけての諸藩では、孝明天皇以来、朝敵とされる長州藩など過激派を排除してきた会津藩、庄内藩が一転して賊軍とされ

たことに納得出来ず、事態がのみ込めないまま、西国諸藩に対する反感が強く、恭順の姿勢を一貫して持ち続けた慶喜を見ながら、一方的に東上してくる官軍に対して抵抗する姿勢をはっきり示している。このなった。奥州列藩同盟の成立がそのことをはっきり示している。この同盟がいつ成立したのかについては諸説があるが、ここでは盟約書と太政官建白書の両者に諸藩が同意してサインした五月三日（佐々木克氏著、中公新書『戊辰戦争』「敗者の明治維新」という説によりたい。上野戦争を逃れた上野輪王寺宮公現法親王は、六月六日会津に到着した。宮は、六月十六日同盟列藩の盟主に就任、同日ひらかれていた同盟会議に出席した。以後宮は六月十八日会津若松を出発し、米沢を経て二十九日白石着、一時仙台に赴いた宮は、七月十二日また白石に戻って、おりから白石城内でひらかれていた同盟の会議に出席している。仁和寺宮を頂く列藩同盟は、形だけは出来たが連係プレーに随所でほころびが出る。新政府軍は奥州街道を北上し、白河城を確保し、三春藩、二本松藩を降伏させる一方で、秋田、新潟地方での戦闘にも勝利して、会津への包囲網を狭めていった。八月十九日には米沢藩が土佐藩の申し入れを受けて帰順することを決めている。

八月二十日、新政府軍の板垣退助らは二本松から会津若松への進撃を開始した。同じ日、新政府軍は各藩に進撃開始を命令、平潟口、白河口両道を合わせて、石庭口、中山口、三斗小屋口、日光口からいっ

せいに出発している。それまで各地に展開していた会津藩兵にくわえて鶴ヶ城からも支援の軍勢が送られ迎撃した。

二

以後の若松城下周辺の戦闘経過を展望しておく。

八月二十一日、日光藤原村にあった会津軍は、放火して藤原村を退却した。この時藩主から急命を受けた山川大蔵は、鶴ヶ城救援のため藩兵を率いて五十里から会津若松に向かった。同じ日、母成峠で新政府軍と対戦した会津軍は敗れて、旧幕府伝習隊・土方歳蔵の率いる新選組は磐梯山北方へ、会津兵は猪苗代城に撤退した。一方塩原の会津藩隊は翌日までに塩原村を焼き払い、藤原口に後退した。

八月二十二日、三斗小屋で戦闘が開始された。(二十六日、新政府軍の勝利で終わる。)母成峠敗戦を受けて、梶原兵馬、萱野権兵衛、佐川官兵衛、神保内蔵助、田中土佐ら会津藩重臣が登城して軍議を凝らし、防御の部署を定めた。この日、白河口戦争敗戦により登城差し止めになっていた西郷頼母は、戦況を見て汚名を負うたまま座死は出来ぬと禁を犯して登城し復帰を許されている。同じ日、古屋作左衛門は、奥羽諸藩の軍勢による会津救援を図り仙台に向かうが、成功しなかった。小池繁次郎を隊長とする遊軍隊が赤井村方面に派遣される。十六橋方面は、強清水に本営を置き、佐川官兵衛以下の藩士を戸ノ口原へ、萱野権兵衛以下の藩士・桑名藩士等を大寺口へ、西郷頼母以下の藩士、水戸藩諸生党等を冬坂峠へ、それぞれ派遣した。

同じ日、鶴ヶ城下に残っていた十五歳以上、六十歳以下の男子に対して緊急召集令が発せられた。さらに、鶴ヶ城中より、警鐘の合図があれば、婦女子は入城すべし、ただし着の身着のままという伝令が下った。

会津藩軍の苦戦の報を受けて、滝沢村に出陣した容保の命を受けた二番隊隊長日向内記は、麾下の兵士を率いて大野原に布陣した。さら

に城中の少年兵が戸口に向けて出陣するが、彼らは滝沢村本陣で佐川官兵衛に遭遇、官兵衛は意気を壮としながらも、君公の命令として城に戻らせた。その夜彼らは天守台下で西郷頼母にあった。頼母は彼らの行動に感じてそれは残念だったろう。自分が引き連れて行くことといったが、命令系統が違つたため断り、梶原兵馬に従い城内に留まった。この日の夕刻、十六橋が、新政府軍の手に落ちた。(この時会津軍のほとんどは、越後戦線や日光方面に向向していた。)

八月二十三日早朝、新政府軍が城下にまで迫つたため入城を促す割場(御用人所)の鐘が鳴り響いた。暴風雨のさなかに住民の移動が始まり、大混乱となった。

大雨の中、戸ノ口原で戦闘が始まるが、新政府軍は甲賀町口郭門を押しえ午前十時頃には北出丸大手口まで進出した。この時滝沢本陣から撤退した容保は、甲賀町郭門で戦つた後城内に戻つた。滝沢本陣に容保と共にいた松平定敬は、途中から別れて援軍要請のため米沢に向かった。この時甲賀町口の守備に当たっていた田中土佐と六日町守備に当たっていた神保内蔵助は、甲賀町郭門を突破された時点で責任をとって自殺している。この日西郷頼母は、冬坂峠にいたが城下に火の手が上がつたのを見て城内に戻り、容保父子に面会して、徹底抗戦を説き、同輩にこうなることは分かつていた。自分は微力を尽くすから、諸君も奮励せよと説いた。

大野原に布陣していた白虎隊士は、十六橋の戦いに敗れ、敵の追撃を受けて分散して退却中、飯盛山に到着した隊士等は、鶴ヶ城が落城したと誤認して集団自殺を図つた。世にいう白虎隊の悲劇である。

城下の戦いでは、入城して城内から銃撃した山本八重をはじめ、中野竹子、依田菊子等槍やなぎなたを取つて戦つた女性陣の奮戦が有名である。(中野竹子は、銃撃を受けて二十五日戦死、神保修理の妻雪子は、捕らえられて自殺した。)この時入城しなかつた女性や老人子

供たちは、西郷頼母の一家のように一家を挙げて自殺したものが多く出た。また入城しようとしたが、あまりの集中ぶりに城門が閉ざされたため、上級藩士の家族の中には、内藤介石衛門の家族のように逃避の途中で自殺したり、手代木直右衛門や丹羽五郎の家族のように戦中戦後津領内を転々と遁れ潜伏していた人たちも多かった。新政府軍の進撃を受けて町の木戸口には住民が殺到して大混乱となり、折り重なって亡くなったものも多かった。大雨で阿賀川が増水し、船が転覆したりして涉りきれずに亡くなったものが数百人に及んだという。この日の市街戦の死者四百六十名以上、自殺した藩士の家族二百三十名以上、焼失家屋約一千戸という。一般住民の死者は数え切れない。

三 この当時悌次郎はどうしていたのか。丸山家系図には、「八月、幌役仰せ付けられ、席は御聞番の上に成され候事。」とあり、軍事作戦に直接関わっていることが分かる。『鎮西余響』の「秋月先生小伝」によってその辺りを確かめてみよう。

水原（現新潟県阿賀野市） 詰めになっていた彼は、七月二十八日以降、越後から津川（現新潟県東蒲原郡阿賀町）に戻っていた。そこでは攻防が繰り返されたけれども、天陰に助けられて形勢は互角だった。そこで佐川官兵衛は悌次郎に次のように話した。

ここは若松を去ること十四里強、いわんや揚川（津川付近を流れる阿賀野川の呼び名。）有り、大川（阿賀川とも。会津地方における阿賀野川の呼び名。）有り。敵なお遠し。猪苗代疆界は若松を距たること近し。あらかじめ戒めざるべからず。君けだし余と共に若松に至れ。

悌次郎が賛成し、二人は若松に戻って作戦を立てようとした。ところが城中の議論では、彼らが猪苗代方面に出撃することに難色を示し、城内に留まることになり、八月二十二日を迎えた。この日の朝、官兵

衛は悌次郎に次のようにいった。

事既に迫れり。共に猪苗代、江戸両道の兵備を巡視せん。

この時にはすでに朝廷軍の若松城包圍網が出来上がっており、精兵が四方から殺到して、どうしようもない状態だった。彼らは二十三日暁がたに沓掛（会津若松市一箕町大字金堀にある峠。白河街道に続く。）で携行食を食べて、赤井村（会津若松市湊町、猪苗代湖の西北岸にある白河街道の駅所。）に向かった。まさにその時、猪苗代地方からしきりに砲撃の音が聞こえので、立ち止まって様子をうかがっていた。しばらくすると戦に敗れた藩兵たちが通りかかったので、彼らを引率して、背炙嶺（会津若松市東山区と猪苗代湖湖西とを画する山地。背炙峠ともいう。初期の白河街道。）に登り、若松城下を遠望すると、城下は全面皆火に包まれていた。しかし樹木が鬱蒼と茂っているので城が落ちたかどうかは全く分からず、困り果てたがともかく一行は城南三丸から本城に入ることができた。城内では、藩公が泰然自若としていつもの通り指揮を執っており、皆その指揮に従って守備を全うしていた。以後悌次郎は、藩公に持することとなった。彼らより城にずっと近いところにいた白虎隊士は、かえって火勢の激しさに圧倒されて状況を見誤ったということだろうか。

#### 四

八月二十五日、籠城の体制が整った。本丸軍事局に軍事奉行小森一貫齋、副役井深守之進、鈴木丹下、野口九郎太夫、春日郡吾、秋月悌次郎がそれぞれ配属されている。（『七年史』）（『会津戊辰戦史』）

八月二十六日、西郷頼母は、高久村にいる陣將に命を伝える使者として城を出る。このとき頼母は長男も同道した。実はこの時、頼母の言動が籠城中の藩士の怒りを買ったため城内から排除されたもので、密かに彼を暗殺する刺客が送られていたという。

頼母氏は国境已に敗れたるを以て、出戦地より引揚げ籠城したの

であります。自己抱負の意見は用ひられず、(中略)若松城の陥落は朝夕に迫るの際、英雄の心緒も繚乱を免れぬであります。が、同僚及事を用ゆる輩を罵倒叱責する状は、実に当るべからざる有様でありしと、私より長者で同籠城中に在りし人が目撃した話であります。(斎藤一馬『史談会速記録』三三三三輯)

元来頼母は京都守護職拜命時から藩の方針に否定的で、任期途中にも単騎京都に押しかけて藩主に辞退を迫って謹慎を申し付けられていたが、戊辰戦争勃発と同時に復権し、白河攻撃の総督に任じられていたところ、大敗して処分を受けることになった。この時彼は、講和を推進して、有利な条件で処分を受けようとしたのに藩内では受け入れられず、かえって解任、閉門という厳しい処分となったという。彼は、今回また前線に復帰して戦闘に参加したのだが、この時、事態のここに至ったのは家老どもが自分の意見を入れなかつたためと強調、これまでとは打って変わって徹底抗戦して城を枕に討ち死にするという究極の戦術を説いて、和議を探る藩主以下と対立激論になったのである。これは、奥平謙輔が説いた節を守るといふ筋論と同じ発想であるが、調停しようとした秋月悌次郎に対して、頼母は、「重臣国事を議す。汝等の喩を容るべき所にあらず」といひ、刀を取って一喝したという。(『会津戊辰戦史』『戦史』)には、「悌次郎懼れて退く」とあるが、このエピソードを筆者はどういう意図で記したのであるか。秋月は、事態が見えているからこそあえて仲裁役を買って出たのである。西郷の家柄意識、敢えて言えば会津藩に染みついていゝ上下意識をなんとかしたいという公用局以来の発想が彼に発言をさせたということであろう。振り返ってみれば、悌次郎が公用局に登用されたときにも、出過ぎた輩として非難の口火を切つたのが頼母であった。頼母は、白河口の総督を務めていたときに、斥候に出した藩士から報告を受けて、こういう状況だから対応策はこうなると説明を受けたときにも、微臣が

口を挟むべきではないと斥けて大敗し、単騎敵の大軍に向かつて突進しようとして、ここで戦死すべきではありませんと、部下が馬を逆にし走らせたという。このような頑迷固陋の上司が采配を振るべきという結末になるか、結果は目に見えているというべきだろう。籠城中、高久から帰城した少年隊員に対して、感情的に反応してすぐさま自分が引率して出掛けようとしたという先に記したエピソードにしても、戦況を理性的に判断しているとはとても思えない。謹慎復権を繰り返して、復帰直後に戦況を理解することなく自分の家柄をかさに着て意見を押し通そうとする彼の発言が、反感を買つたのも当然といえよう。この時期悌次郎は、藩内でようやく識見が認められるようになった。彼の経歴書には、「八月、幌役仰せ付けられ、席は御聞番の上に成され候事。」とある。藩内の序列がこの当時どんなに大切なことだったかが分かるだろう。

五

会津藩の将兵は徐々に包圍網を狭められ、追い詰められていった。郡上藩の江戸屋敷から内々で派遣されていた凌霜隊士の一人、矢野原与七は後にこの時のことを『辛苦雑記』という記録に残している。それによると彼らは、八月二十八日より大内宿で西軍と戦っていたが、敗走して九月一日関山宿にたどり着いた。それでも激戦の末三日午後敗走してちりぢりとなり、四日になって彼らはようやく若松城下に入り、会津藩士小山田伝四郎の指図により秋月悌次郎宅に止宿した。こゝは秋月悌次郎の家というよりは、丸山本家の家といふべきだろうが、悌次郎の方がよく知られていたということだろう。それにしても、残留者が一家を挙げて自殺した上級武家と違って、戦時下の若松市内には、従来通り家に残って暮らしていた家族も多かったことが分かる。凌霜隊のメンバーは、六日にここを引き上げて城中に入り、日向内記隊に属した。(『心苦雑記』)には、日向内記隊は、「白虎隊とて若年血

気のもの五十人也。」とあり、後に配置換えになったときには、以前の日向隊に戻すよう交渉して認められている。日向内記は、隊士の人望が厚かったことが知られる。ちなみに、近年取り壊された秋月家旧宅には、刀傷が数カ所ある柱があつて、それらは戊辰戦争当時この家に宿泊した武士達が残した刀傷だという言い伝えが残されていた。）

六  
九月四日、米沢藩が降伏した。事情を知らない会津藩は、前日の三日、堀糸之助、吉村寅之進を米沢に派遣して援軍の派遣を要請した。ようやくの思いで米沢藩相竹俣美作に面会した彼らは、必死に救援を求めたが、この時米沢藩はすでに降伏に決していたので言を左右にして応じなかった。（『会津戊辰戦史』）

『戊辰事情概旨』によれば、

九月五日夜、会士萱野安之助、伊東左太夫、柴守三、土屋総太郎、手代木直右衛門、秋月悌次郎等、陸統米城ニ来リ急ヲ告ケ救ヲ乞フ。我藩ノ堀尾保助固拒之、徐ニ論スニ順逆ヲ以シ、示スニ禍福ヲ以シ、之ニ帰降ヲ勸ム。且、微ニ市川宮内等、曩ニ参謀ニ聞処、降者ハ首惡ト雖トモ誅スルナク、或ハ如綾ノ血食ヲ存セン等ノ語ヲ諷ス。会士頗ル悟ル。

とあり、会津藩士が大挙米沢に向向していることは事情の切迫を物語っているのだが、この現実を目にした会津藩でも、一気に終戦への動きが顕在化してくることになった。

別に、『米沢戊辰実記』には、この間の事情が詳しく記されている。

九月四日夜、松原ヨリ飛脚来ル。会人金子次助ノ手簡ナリ。其意会城切迫ニ付是非面談イタシ度儀有リトノ事ナリ。去レトモ本陣用事差湊シ候ニ付出張面談ハ相成ラサル旨答書ノ評決ユヘ飛札ヲ以テ断リタリ。

同六日、結城ノ医家阿知波祐仙来テ面談ヲ請フ。其意ニ曰、山形

迄急用アリ。此駅迄参リ候処、取押ヘニ相成、迷惑仕候。実ハ、手負ヲ連レ山形ヘ参リ治療頼入度心得ニテ相越シ候ナリ。取押ヘラレテハ当惑至極兼テ知己ノ好ミ有之続キ何卒通行相成候様周旋クレ候ヘトノ頼ナリ。依テ私儀、当時軍事局ヲ離レ候ヘトモ猶評議ノ上返答スヘシト云。乃評議ノ上、諸藩ノ手負人関門外ニ充満イタシ候。貴藩ニ限り通行ヲ許シ難キ旨諭解シ之ヲ返ス。同日、会津ノ使者三浦定之助・小林謹吾・阪内七郎来リ曰、弊藩追々切迫ニ相至リ、上下共イ尊藩ノ後応援ヲ仰ギ、町在ノ者ニ至ル迄兵糧ヲモ取設ケ待奉ル事ニ付仮令戦争ハ成サレズトモ多少御人数御繰込ミ下サレ候ハバ、一ツニハ敵ノ銳氣ヲ折キ、二ツニハ味方ノ勇氣百倍奮ヒ申スベク候間急ニ御応援成下サレ度、重役ヲ以テ願ヒ奉ベキ処籠城中軍事ニ暇之レ無ク微臣共ヲ以テ願ヒ奉ルト。

米沢藩が答えている。  
もともと戦争をするというつもりはなかったが、道路が封鎖されて奥羽地方の意志を朝廷に伝える方策がなかったため、よんどころなく戦争となったが、連絡がつくようになったので、今では主人も謹慎している状況である。米沢藩からは先日、山田元助・松木誠蔵を使者として会津に派遣してある。奥羽四藩合併の上のことであるから、一致して行動できるよう相談したいということで、現在の状況に立ち至っている。それ故、今になって応援の頼みを受けるとは思っても居なかった。

「貴藩連モ武門ノ意地タ、ハ申条御家断滅ノ際ニ候ヘバ、御趣意ノ程ヲ天朝ニ御通シ御家長久ノ謀計ヲ廻ラサレ候ハバ、一二ハ天朝ヘノ御忠節、二ニハ御先祖ヘノ御孝養、三ニハ数万ノ生靈ヲ塗炭ノ中ヨリ御救ヒナサル御仁恵ノ御事ニ候ヘバ、宰相様ニテモ必御同心遊バサル御義ト存候。然ルニ差出シ候両使ト途中ニテ御行違ヒニ相成候ハン。援兵御頼ニハ候ヘドモ右ノ次第二付御得心下

サルベシ。」ト。

会津の使者達は、これを聞いて、自分たちは、三日早朝に出発しているのに、米沢の使者の件は知らなかった。お説は尤なので、これ以上援兵をお願いすることはない。だが、天朝へは我が藩のことをどのようにお伝えいたしたいのか。帰国の上申し伝えたいので、承りたいと応じた。これに対しては、使者のいうことと齟齬しては困るので、これ以上のことは言えないとの答があり、会津の使者は帰っていった。『鎮西余響』の秋月先生小伝には、この時のことを

既にして圍城を出でて、陣將萱野長修に属し、高久村の支営に在り。米沢藩主の専价(特使)露布短簡を齎して至り、謂はく、我が敵視して共に戦う所の者は、実に王師なり。今復た戦を辞する無し。すみやかに降るに如かず、と。先生入りて藩侯に稟す。藩侯すなわち、人を同盟各藩に遣してこれを謀る。

と記している。激しい攻撃にさらされる中、籠城中の会津藩将兵は、米沢藩の降伏など新しい情報を得て城内で緊急会議が開かれ、対応策が協議されたというのであるが、これらは後年にまとめられたものであり、『戊辰事情概』に記されているような動きがあったことは間違いないと思われる。

七

九月八日、桃沢彦次郎と、武田虎太郎が米沢に出掛けて倉崎七左衛門、堀尾保助と面会した。話題は、「会津帰順ノ事」である。(『米沢戊辰実記』)この記事に続いて、『実記』には、

是ヨリ先五日ノ夜会士萱野安之助・伊東左大夫・柴守蔵・土屋総太郎・手代木直右衛門・秋月悌次郎等、陸續来リテ援兵ヲ乞フ。堀尾保助論スニ順逆ヲ以テシ、禍福明示シ、大滝新蔵等、朝廷ノ深意首患ト雖ドモ誅スル無キト糸ノ如シト雖ドモ、宗社ヲ存スルトノ両義ヲ以諷論ス。会人頗ル悟ル。猶米沢ニ止リ大國等二本松

ヨリ帰ルヲ待ツ。蓋シ二本松在陣參謀ノ意ノ有ル所ヲ確取スルニ在リ。帰ルニ及デ參謀ノ語中會藩降伏セバ寛典ニ処セラルコト疑ヒナキヲ説ク。果シテ大滝ノ言ノ如シ。会士益々感悟ス。堀尾ニ謂テ曰、国ニ歸リ君臣ヲ説論シ帰順セシメント。昨七日夕手代木・秋月等米沢ヲ發ス。

と、五日にさかのぼつての記述がある。先に記した『戊辰事情概』の記事を補強する情報である。この時秋月、手代木は一度会津に戻っているのである。

堀尾は、桃沢に対して手代木、秋月が逗留中に談判した模様を語って聞かせた。それを聞いた桃沢がさらに答えて、「当時会津では、官軍に包圍されていて、城外と城内に二分されていた。自分は一瀬要人の手に属して城外にあったが、弾薬尽きなすべがなかった。米沢藩が帰順を説かれたと聞き、その斡旋を頼みたいと思った。城内については、自分が帰って君臣を説得する。降伏の書面は、容保の名前で提出しよう。」といったが、倉崎等は、「事は重大なので、自分たちの判断では何とも成しがたい。藩の重臣に報告したいから、その間に官軍に乞う嘆願書を起草しておきなさい。」と桃沢に答えた。この結果を彼等は家老に報告し、対応策をまとめ、土佐・高鍋両藩にはかつて了承を得た上で、桃沢に伝達した。この時桃沢は次のような文章を起草したという。

一筆啓上仕候然者秋冷之節ニ御座候処御両所様愈御勇健ニ被為人候奉奉珍賀候然此度城下大迫切何共可仕様無御座此上ハ降伏謝罪仕度心根ニ御座候間御尽力之程幾重ニモ奉願候右願迄如此御座候頓首

九月八日

桃沢彦次郎

倉崎七衛門様

堀尾 保助様

これとは別に桃沢が持参した嘆願書の草稿も残されている。

当年伏見表ニ於テ不計モ戦争ニ立至候者主人容保朝庭へ奉抗候儀者毛等無御座畢竟徳川慶喜上京致候故随從罷登候途中不計モ戦争ニ相成恐多モ宸襟ヲ奉悩候段誠以奉恐入候元来主人容保儀者数年京師ニ罷出先帝之叡慮ヲ遵奉シ粉骨ヲ尽シテ皇国之御為ニト奉存処不肖ノ身ヨリ而伏見之暴動ニ至リ候段ハ誠以奉恐入候其節坂地ヨリ早速江戸江罷帰恭順謹慎之上数回歎願仕候処免罪難成御旨ニ而家来一同窮途ニ悲嘆シ進退ニ迷惑仕候処一ト先帰国仕其上城外ニ謹慎罷在候処七道諸藩追討之論旨被差下候趣一同恐縮仕日夜涕泣仕候而幾重ニモ謝罪申上候処最早先鋒国境ニ迫候間右軍門ニ降伏謝罪仕只管悔悟之程奉哀訴候故奥羽二十一藩同盟之上督府軍門へ弊藩之免罪ヲ奉歎願候処深ク逆鱗ニ戻リ候ヨリ免罪難成依之同盟諸侯今日之形勢ニモ立至申候処元来弊藩ハ朝廷ニ奉抗候儀ハ寸分無御座今日之形勢ニ至リ泣血叩頭降伏何レニカ可仕様モ無之至急眼前ニ相迫一同枕城遂死ニ決心仕候得共何卒公大聖明之御潤沢ヲ以テ一方ヲ御免被下寛大之御処置被下候而降伏謝罪之上ハ君父之咎モ再霽レ下ハ万民土炭之苦ヲ免候様相成候間只管御寛典之御処置ヲ以一方ヲ御免シテ被下候様奉懇願候

慶応四年

辰九月八日

一ノ瀬要人  
萱野権兵衛  
上田学大夫

この夜、堀尾は再度桃沢に対して、官軍側の会議内容を知らせた。桃沢は、開城までの段取りについて説明したので、翌九日倉崎、堀尾は再度降伏、開城の手順を確認した上で、桃沢に青柳延之助、大竹直記を同行させて、吉報を持って帰れと翌朝会津に送り出したとある。

八

『戊辰事情概』には、この状況が以下のように記されている。

八日、会士桃沢彦次郎、武田虎太郎、相踵テ来ル、参政倉崎七左衛門及保助等応接セリ、会士益感悟シ、馳帰テ君臣ニ面諭シ、速ニ帰降センコトヲ約ス。因テ藩士青柳延之助、大竹直記、桃沢ト共ニ会入、期ヲ過キ、食言スル勿ラシム。

倉崎七左衛門と保助（堀尾）が、会津藩士桃沢彦次郎、武田虎太郎に会い、条理を尽くした説明をしたところ、彼らは感服して早速会津に戻り藩公以下会津藩士に帰降を進言すると約束したので、米沢藩士の青柳延之助、大竹直記が、二人に同行して会津に向かった。実行が延び延びになって約束が守られないという事態にはならないようにお目付役として同行したというのである。こちらの方がより進んだ展開になっていることが分かる。この時期会津藩は米沢藩に対してさまざまアプローチをしていたことであろう。桃沢等は、十日、米沢を出発した。『戊辰事情概』には、

会士辞シテ帰ル。後、遂ニ降伏ニ至ル者、実ニ此時ニ胚胎セリ。とある。九月十一日、米沢藩の使者が、会津藩本営の熊倉に来て、朝廷軍の攻撃を緩和させるため、人質を出せと迫った。

：（前略）貴藩の重臣一人を弊藩に質と為し、之に口を藉りて攻撃を緩うするの外、策の出づべきなしと。是に於て陣將以下、軍事方集りて之を議したるが、皆黙して言を発する者なし。（『会津戊辰戦史』）

口を開いたのは上田八郎左衛門だった。

予往かん、往いて攻撃を緩うすることを得ば幸なり、若し降謝の議成らずんば、彼等の予が頭を斬るに任せんのみと。

これに奉行添役の一柳幾馬が同調したので、この二人は米沢藩に向かった（人質になった）。

十一日、熊倉に到着した桃沢が降伏を説いたが、一瀬要人、萱野権兵衛は桃沢を檜原村に放逐したという記事が、『戊辰事情概旨』にはある。

桃沢彦次郎等モ亦、我藩士大竹某、青柳某ヲ提掣シ相踵テ還リ、先城外ニ在ル隊長一瀬要人、萱野権兵衛ニ勸メテ速ニ帰降セシム。要人等、肯セス、彦次郎ヲ檜原駅ニ放置セシム。

米沢藩が心配していた通りに事態になったことがうかがわれるが、その中で、先のように人質が送られるという状況が出てきていることが分かる。

九

『米沢藩戊辰文書』には、九月八日、手代木直右衛門と秋月悌次郎が堀尾保助に休戦を申し入れたとある。米沢における会津藩と米沢藩との関係を桃沢を中心に描いた『実記』に対して、それとは別の動きのあったことを示すものである。

この時二人が米沢藩に提出した手紙が残されている。

尚以手前ヨリも手續を以、休戦之義申立候積ニ御座候。

昨夜内啓仕候処、西南両方ヨリ被攻寄、城中へ道路差塞り、今以日夜戦争仕候由、同藩共申聞候事ニ御座候。就而、御内教報之義も精々尽力、是非以為行届度存候へ共、日夜之戦争無已時勢ニ而ハ右談判も整兼候間、此上何とも恐入候へ共、暫時休戦之義御取計之程奉伏願候。前文之通、道路塞り候ても両生ニハ如何体ニもいたし、城内へ相達候覚悟ニ御座候間、左様御舎被成下度奉存候。

已上。

九月八日

秋月悌次郎

手代木直右衛門

堀尾 保助様

昨夜内々藩公に報告しようとしたところ、西と南の双方から攻撃されていて、城中への道が封鎖されており、今もって激戦が続いているとことです。ついては内々で教えていただいたことすっかりまとめたと思っていますが、戦争継続中ということで話も中々まとまりませんので、申し訳ありませんが、暫時休戦を取りはからっていただきたいのです。先にも申しました通り道路が封鎖されていますが、私共はなんとか城内に戻って報告しますので、よろしくお含み置き下さい。

冒頭にある文言は、米沢藩側からも朝廷軍に休戦を働きかけるといふことだろう。

米沢藩で彼らに対応したのは、庶務頭取堀尾保助である。彼は、参政木滑要人と共に仙台藩を説得するなど、盛んに同盟各藩の説得活動を続けていた。この時以後、会津藩は具体的な降伏の手順に向けての交渉作業を続けることとなった。注意しておきたいのは、必ず交渉役が複数担当になっているということである。桃沢には武田が同行していた。実際の口上役が秋月だったとしても手代木直右衛門が必ず同行する。これは米沢藩を見ても分かる。彼らとは別のメンバーが派遣される時にも決して単独派遣ということはなかった。

十

米沢藩の必死の働きかけにもかかわらず降伏に向けての動きは遅々として進まない。新政府軍は九月十二日、諸藩に十三日の若松城攻撃の指令を出す。この日は雨が強く総攻撃は十四日に延期されたが、それにもかかわらずこの日若松城に向けて発射された砲撃の数は千二百発を超えていたという証言がある。(『男装して会津城に入りたる当時の苦心』)この日も桃沢は、米沢藩士と共に一の堰村の会津藩陣営に行つて降伏を働きかけている。

○桃沢彦次郎、米使一同来テ赦罪如何ニト尋不、敢テ従ハズ。(『結



## 草録(一)

朝廷軍の猛攻撃が続く中、城内では密かに米沢藩に降伏手続きの斡旋を依頼する検討がなされていた。

『会津戊辰戦史』には、九月十五日、秋月悌次郎と手代木直右衛門が、米沢藩の陣営に行き、米沢藩士の先導で、土佐藩参謀板垣退助に面会して、降服を申し出たとある。この辺り、十五日から二十一日までの経過は、『七年史』とは微妙に差があり注意が必要だが、とりあえず諸書に伝えられている情報を整理しておく。

米沢藩側の記録『戊辰事情概旨』には、

会ノ君臣亦定議、手代木、秋月両士ヲ密ニ城ヲ縋槌シテ出シ、之ニ会セシメ、席(虎)ニ依頼シ、米臣ニ就テ降ヲ乞フ。

とあり、『結草録』には、

十六日、謝罪論決スルヤ桃沢彦次郎、米使ト共ニ佐川陣將ヘ往クト聞ク。手代木、秋月ノ両士、何レヘ行タルヤ知ラズ。萱野陣將、町野源之助、樋口源介入城ス。

とあって、この間の事情が分かる。さらに『戊辰事情概旨』には、

十六日、時ニ会城勢孤ニシテ、援絶ヘ力支ユル能ハス。適重臣手代木直右衛門、秋月悌次郎等、我藩ニ使シテ還リ、垂涕シテ速ニ帰降スルヲ極言ス。容保及ヒ重臣、心大ニ揺キ衆論沸騰、議久シク決セス。

とあって、米沢から帰城した手代木直右衛門・秋月悌次郎等は涙ながらに、松平容保はじめ重臣に降伏を進言し、城内の議論が沸騰したことが分かる。「極言」という言葉に事態を憂える二人の切迫した心情を読み取ることが出来よう。こうした状況は、朝廷軍にも伝わっている。

十六日夜、肥後父子降伏之使者、秋月悌次郎、手代木直右衛門、小森一貫斎、軍門へ降伏歎願申出候二付、同廿日、右ノ者共御返

## シ相成。

(九月二十六日付中村半次郎書簡)  
日時が、他の資料と合致しない点があるが、これは開城後の書簡であることを考えれば、記憶違いということ、彼等が中村半次郎に面会したことは間違いないといえよう。

『米沢藩戊辰文書』によれば、米沢藩士針生虎之助に導かれた手代木直右衛門、秋月悌次郎、桃沢彦次郎等会津藩士が、米沢藩の本陣から薩摩藩本陣に連れて行かれたのは、九月十八日のことである。

十八日夜半頃、針生虎之助、手代木、秋月、桃沢之三使を森台ト申処(塩川ヨリ一り半)、与板本陣迄約束之通召連来候二付、最期之一盃味噌ニ而振舞、大小等取上ケ我々之僕ニ為負、若松表薩州本陣伊地知参謀迄、夜明ヶ前ニ罷越候。

この時彼等は、味噌を肴に別れの盃を振る舞われ、大小は取り上げられて米沢藩の従者が背負っていった、ということ、彼等の関係がよく分かる。この時、米沢藩側は、桑名藩主松平定敬の動静を探りを入れたり、どのような形で降伏するかなど、さまざま話し合いがなされていて、降伏に至るまでの交渉過程を窺い知ることが出来る。

十一

この辺りの事情を詳述しているのは、『米沢戊辰実記』である。

九月十七日、たまたまこの日の夜針生虎之助が、塩川の米沢藩本陣に来て、秋月等の動向を報告した。

往日、河村ト袂リ別チ桃沢ト共ニ会城ニ入ラントス、官軍ノ囲ミ数重ニシテ入ルコト能ハス、勝常村ノ肝煎金子勝之助、桃沢ト相識ル故ニ金子カ家ニ潜伏ス、此時会将佐川勘兵衛兵数百ヲ擁シテ城外青木村ニ陣シテ官軍ニ抗ス、我桃ト共ニ勝之助ヲ嚮導トシテ間道佐川ノ陣ニ達スルヲ得、佐川ニ説クニ赦罪ノ事ヲ以テス、議未決セス、会々藩ノ士手代木直右衛門、秋月悌次郎潜カニ城ヲ

出テ佐川ノ陣ニ至ル、曰、城内赦罪ノ議起リ両公之ヲ許ス、我カ輩使命ヲ蒙リ米沢ノ陣ニ趣キ、官軍ヘノ周旋ヲ願ハントスルナリト、佐川大ニ悦ヒ、議遂ニ決ス、依テ手代木、秋月、桃沢ト共ニ勝常村ニ来リ、三人ヲ同村ニ潜伏セシメ独リ帰りテ此事ヲ報スルナリト、

先に米沢に来ていた桃沢は、官軍の包围が厳しくて城内に戻れず、勝常村の肝煎り宅に潜んでい佐川の説得に当たっていた。ちょうどその時手代木と秋月が、潜かに城を抜けだし、佐川の陣にたどり着いて城内では謝罪するという方向の意見が出て、容保、喜徳両公の許可が出た。自分たちは米沢の陣に行つて周旋を依頼するところだという。佐川はそれを歓迎して手代木秋月桃沢と共に肝煎り宅にやつてきて三人をそこに残して自分は報告のため帰つていった。

会々我カ參謀齋藤主計所軍ヲ督励シテ本日來リテ当本陣ニ在リ、山本寺乃チ齋藤倉崎等ニ謀リ此事ヲ成サシム、薩長諸軍方サニ營シテ此ニ在リ、齋藤往テ之ヲ勞フ、村田奥平岡村等在リ、越境使事ニ於テ相識ルノ歛アリ、村田城内ノ事ニ意ヲ属スルヲ説ク、針生ノ報ヲ得ルニ及テ官軍ノ營所タルヲ憚リ我カ營所森台村ニ於テ事ヲ謀ルヲ約シ齋藤倉崎等河村ヲ伴ヒ同村ニ至リ針生ヲ勝常村ニ遣ハシ、秋月等三士ヲ召ス、

たまたま米澤藩參謀の齋藤主計が、この本陣に来ていた。薩長の軍勢もここに屯営していたので、齋藤は、挨拶してまわつた。村田、奥平、岡村などの諸將がいた。彼は針生の報告を受けてここが官軍の屯所である事を気にして森台で問題解決に当たることにして、秋月等三人を呼び寄せた。

この夜三使潜カニ森台ニ至ル、請テ曰寡君既ニ深く罪ヲ知ル、臣等不肖志一二社稷ヲ存スルニ在リ、願クハ公等亮セヨト、辞氣懇謹人ヲ動ス、主計等曰旨ヲ領ス、生死以テ子カ曹ノ志ヲ成サント、秋月佩刀ヲ解キ齋藤ニ贈リテ曰、是会津藩四郎作ナリ、百戦未タ

嘗テ身ヲ離サス、幸ニ棄テラレサレト、桃沢七発銃ヲ解キ針生ニ与フ、軍吏ヲシテ之ヲ預ラシム、夜漏子刻ニ下ル、皆曰、護送明日ヲ待タント、齋藤曰、事方サニ急タリ、何ソ明日ト云ハント、乃チ二士ノ刀ヲ収メ三士ノ腰ヲ繼シ、倉崎等ト之ヲ護シ、森台ヲ発ス、若松ヲ距ル三里強、若松ニ至ル、天未タ明ケス、伊地知參謀ノ寓館ヲ叩キ請謁シテ三士ノ降意ヲ具狀シテ進止ヲ取ル、參謀曰、我手代木秋月ノ名ヲ聞ク久シ、事狀具サニ之ヲ領ス、總督宮坂下ニ在リ、速カニ之ヲ奏セン、三士ハ則チ子カ曹ニ付ス、宜ク其繼ヲ解キ、衛士ヲ以テ之ヲ護スヘシト、且曰、若松ニ板垣退助在リ、同僚ナリ、亦宜ク稟告スヘシト、伊地知容貌揚ラス、言辭訥訥而シテ条里明白措示牀ヲ得、人其英偉ニ服ス、即チ三士ヲ某ノ一舎ニ寓シ兵士五人ヲシテ衛ラシム、天始メテ明ク、

この夜森台にやつてきた三人がいうには、藩公は深く罪を自覚している。私たちが願っているのは会津藩の存続だけだ。分かってほしいと。彼等の言葉、態度には人を動かす力があつた。齋藤主計は分かつた、命を掛けてあなた方の言い分を通そうという。そのとき秋月は佩刀を取つて齋藤に渡し、「是は、会津藩四郎作である。肌身離さずもつていたものだ、受け取つてほしい。」といった。一方桃沢は、持っていた七連発銃を針生に渡した。これらは軍吏に預けられた。時間は十二時を過ぎていたが、齋藤は今すぐ出掛けるとして、三人の刀を取り上げ、腰に縄をうって倉崎等と出発した。森台から三里あまり、未明に若松の伊地知參謀の宿舎に到着、面会して三人の意向を伝えた。參謀曰く、手代木、秋月の名は以前から聞いている。事情は分かつた。総督宮は現在坂下にいる。すぐに報告しよう。三人は私が預かる。いましめを解いて衛兵に守らせる、と。さらに、若松には板垣退助もいる。同僚だ。これにも連絡しておこうといった。伊地知は風采は上がらず言葉も訥々としているが筋道が通り指図はしっかりしていて、皆敬服している。三人がある建物に入れられ五人の衛兵で守られたところ、夜があけた。

ここには、会津藩がどのように米沢藩に働きかけたかが、詳述されている。齋藤主計に会って、口上を述べた秋月が、齋藤の言葉に感激して佩刀を贈る、桃沢は手引きしてくれた針生に銃を渡すなどという話はどこにも伝えられていない。縛められて伊地知の許に送られたことには、伊地知の風貌を活写するなど、当初列藩同盟に参加していたのに、官軍の先鋒として行動している米沢藩側からの情報は、貴重だといえるだろう。

十二

先の記事に続いて総督府に関する情報のあとに、九月十九日の記事が始まる。

齋藤倉崎等今既二伊地知参謀ニ謁シ命ヲ承ケ今早朝板垣参謀ノ寓館ニ至ル、参謀会々病ム、軍監谷守部出テ面接シ齋藤等ノ言ヲ承ケ以テ之ヲ参謀ニ報ス、出テ、曰、旨ヲ領ス、病本深カラス、癒ヘハ則チ速ニ之ヲ報セント、

齋藤、倉崎等は、早朝板垣参謀の宿所に赴いた。ところが板垣は病気がだったので、軍監の谷守部が話しを聞いて板垣に報告、戻ってきた彼は、趣旨は分かった、病気が治つたらすぐに対処するという板垣の言葉を伝えた。

齋藤等帰り三士ヲ慰ス、三士曰、督府幸ニ臣曹ノ罪宥セハ、願クハ再ヒ城中ニ入り衆ヲ諭シ帰降セシメン、然ラスハ開城未タ必スヘカラサルナリ、手代木秋月曰、城兵年少鋭気勃々一死ヲ以テ分トス、我カ曹之ヲ服スルヲ保セス、幸ニ桃沢アリ、年少皆信ス、力ヲ能ク之ヲ服スルヲ得ト、

齋藤等が、手代木等三人のところに戻って彼等を慰勞すると、彼等は私たちをもう一度城中に帰してほしい。そこで、城内を説得したい。そうでなければ、開城は決まらぬという。手代木と秋月は、城内の兵士は血氣盛んな若者が多く、私たちでは説得しかねる。桃沢は、若者に信用されているから、彼ならうまく説得できると言った。

二公が城中にあるなかで、若い先鋭的な藩士を抑えられないという二人の言葉には、実感がこもっている。

巳刻板垣参謀ノ報アリ、齋藤倉崎往テ見ル、意旨概ネ伊知地ノ如シ、且ツ意ヲ致シテ曰、彼レ降ヲ米沢陣門ニ入ル、恐ラク私ニ涉ルト、齋藤曰、彼レ実ニ我ニ依ル、我レ直ニ両公ニ謁シ進止ヲ乞フノミ、板垣曰く、善シ、因テ三士城ニ入ルノ事ヲ請フ、板垣曰、当サニ公議ニ付スヘシ、且ツ三士ハ何ノ路ヲ経何ノ門ヨリ入ル、彼レ再ヒ城ヲ出ル幾時間ヲ費ス、開城何ノ日ニ在ル、速ニ具状スヘシト、帰テ之ヲ三士ニ告ク、三士曰、恐ラク間ニ日ヲ費サン、願クハ公等意ヲ属セヨト、齋藤曰、何ソ時期ヲ曠フセン、宜ク間一日ニ在ルヘシト、初メ板垣ヲ見ル、公事言畢リ板垣嘆ジテ曰、三士者忠矣、臣ハ各其主ノ為ニ死ス、会津固ト罪アリト雖モ伏見発砲ノ如キハ猶尚恕スヘキナリ、後チ征討師將サニ興ラントスルニ及テ自ラ之ニ処スルヲ知ラサルノミ、方今ノ形勢ヲ察スルニ又尊氏ナキヲ保セス、志士常ニ報国ノ忠ヲ存セサルヘカラスト、

午前十時頃板垣参謀からの連絡が入った。齋藤と倉崎が行って面会すると、内容はほぼ伊地知と同じだったが、さらに米沢の軍門に降つたというのは私的な関係かと問うので、齋藤は、そうだ、自分は両公に会って、進退を決してもらつつもりだと答える。板垣が納得したので、次に三人が城に戻る事について諮ると、板垣は、それは会議してからでないといいつつ、それで彼等ほどの道経由で城に入ろうとするのか、次に城を出るまでに何時間かかるか、開城の日は何時になるのかと聞いてきた。戻って三人に聞いたところ、おそらくは二日かかるというので、そんなに間をおけない、一日でいい。この時初めて板垣を見たのだが、作業が終わったあとで彼は、しみじみとした口調で、三人は、忠臣だ。臣下は主君のために死ぬ。会津藩は罪があるとはいえ、伏見の発砲は許されてよい。その後征討軍が編成されたときに対処法を間違えたのだ。現在の状況は、何時また尊氏のような逆臣が出ないとも

限らぬ。志士たるもの、常に報国の忠を持つべきで、彼等はまさにそのとおり的人物だといっていた。

以後の行動について、この時細かく段取りがつけられている事が分かる。それにしてもこの時板垣が漏らしたという戊辰戦争についての評言は、ほとんど知られていない。鳥羽伏見の発砲は、許す事が出来る云々という言葉は、彼が薩長出身ではなく土佐藩だったからこそこの言葉といえるが、この時期にこうした言葉が出ているという事には注目しておきたい。

十三

降伏問題は、最後の核心部分に入る。

齋藤初メ建言シ曰、愚ヲ以テ之ヲ料ル、会城宜ク一通ノ降表有ルヘキニ似タリト、参謀之ヲ領ク、之ヲ三十二告ク、秋月為メニ降表ヲ草シ可否ヲ謀ル、其文ニ曰、

齋藤は、板垣に、この際降謝状が必要ではないかといった。板垣がうなずいたので三人にその旨伝えと、秋月が一文を草して皆に見せた。その文は臣容保護而奉言上候拙臣儀京師在職中奉蒙朝廷莫大之鴻恩ナガラ万分ノ微忠モ不奉報其内当正月中於伏見表暴動之一戦仕不憚近畿奉驚天聽候段深奉恐入候元來勤王一途之愚忠毛頭別心無御座候得共僻土頭陋之固習旨意行違ヨリ引続キ今日迄遂奉抗敵王師今更何ト可申上候無御座実不容天地之大罪措身ニ無所仕合只々恐懼仕候熟々相考候得者天下之大乱ヲ醸シ無罪之人民ニ土炭ノ苦ヲ為受候儀全ク臣容保之所致御座候得者此上如何様之大刑被仰付候共聊御恨無御座偏ニ臣父子並家來共之死生奉仰天朝之聖断候但国民与老幼婦女子トニ至候テハ元來無知無罪之儀ニ御座候間右等者一統御赦免被成下度何凶迄モ奉哀訴候依之從來之兵器悉皆奉差上早速開城官軍御陣門工降伏奉謝罪寺院ニ籠居奉待罪候此上万々一毛聖朝御復古出格之御垂憐ヲ以テ寛典之御沙汰於被仰付者冥加之至難

有奉存候此段冒万死大総督府御執事迄奉歎願候誠恐誠惶頓首再拜

源容保護上

慶応四年九月

齋藤之ヲ見意竊カニ満タス。別ニ草シテ秋月ニ示ス。三十二ヲ捨テ人ニ從ヒ遂ニ其全文ヲ用ユ。後チ板垣謂テ曰、当日君臣交々分疏アリ、督府皆曰、君臣各々其体ヲ得ト。

齋藤はこの草案が気に入らず、別に一文を草して秋月に見せた。会津藩の三人は、自己主張をすてて齋藤の文章を用いることにした。後に板垣は、この時君臣は交々その本分を守ったといい、官軍の督府でも同じように感じたという。

齋藤ノ草ニ曰、

臣容保味死再拜伏惟臣不肖往年叨奉京都守護職蒙被聖恩嶽高滄深而驚劣未報伎(筆者注、涓に同じ)滴微忠罪已深而今年正月妄動干戈于伏見不憚王畿震驚九重重冒罪累万死曷贖雖然区々之愚忠未嘗忘勤王報効也今又何言惟臣自一去京畿僻在遐陬不知今日之形勢遂致六師大討実不容天地之大罪也而又反復思之釀成天下之乱土炭無辜之民罪皆婦臣之一身斧鉞無所遁臣等父子及家士唯嚴刑是待独至一國人民与家臣老幼婦女則未初知一事伏願寬赦不敢戮実為幸多重不勝哀訴之至因兵器鉄砲悉具以悉之下吏臣父子速出城帰降退閉居某寺門以待典刑耳伏惟聖朝大仁天覆地載幸蒙破格之寛典是謂生死肉骨非敢所望也誠恐誠惶頓首々々再拜

戊辰

九月 松平容保上

齋藤の草稿を読み下してみよう。

臣容保、味死(死を覚悟して上奏する際の決まり文句。)再拜伏して惟んみるに、臣不肖にして、往年叨に京都守護職を奉じ、聖恩を蒙被すること嶽高滄深にして、驚劣(にぶいこと)未だ伎

涓滴微忠を報ぜず。罪已に深し。而して今年正月、妄動して伏見に干戈し、王畿を憚らず、九重を震驚し重冒罪累、万死曷ぞ贖わん。然りと雖ども区々の愚忠、未だ嘗つて勤王報効を忘れざるなり。今又何を可言わん。惟うに臣自ら一たび京畿を去り遐陬に僻在して今日之形勢を知らず。遂に六師を致して大討す。実に天地に容れざるの大罪也。而して又反復してこれを思う。天下之乱を醸成し、無辜之民を土炭す。罪皆臣之一身に帰す。斧鉞遁るる所無し。臣等父子及家士、唯嚴刑是れを待つ。独り一國人民と家臣老幼婦女に至りては則ち未だ初め一事を知らず。伏して願わくば、寛赦敢えて、戮せざれば実に幸多重と為す。哀訴之至りに勝えず。因りて兵器鉄砲悉具、悉くの下吏を以て臣父子速かに城を出でて帰降、退いて某寺門に閉居し、以て典刑を待つのみ。伏して惟んみるに、聖朝大仁天覆地載、幸に破格之寛典を蒙り、是謂生死肉骨非敢所望也誠恐誠惶頓首々々再拜

戊辰

九月

松平容保上

なんとこの時、出先で降謝文を求められた秋月が草案を示すと、米沢藩の齋藤が別に一文を草してそちらが採用されたというのである。開城に当たつての細かな条件がひとつひとつ整理され、整えられていく様子がよく分かるエピソードである。齋藤の作文は、会津藩に先だつて降伏していることよつて対応できたものであろうが、求められて即座に草稿を作成する秋月の才能とそれを受ける齋藤の態度は、みごととしかいえない。ちなみに実際の開城式で手渡された本文は、ここに見られる二文とは異なるものである。

臣容保味死再拜伏惟臣不肖往年叨奉京都守護職蒙被聖恩嶽高滄深而驚劣未報伎涓滴微忠罪已深而今年正月妄動干戈于伏見不憚王畿震驚九重重冒罪累万死曷贖雖然区々之愚忠未嘗忘勤王報効也今又

何言惟臣自一去京畿僻在遐陬不知今日之形勢遂致六師大討実不容天地之大罪也而又反復思之醸成天下之乱土炭無辜之民罪皆歸臣之一身斧鉞無所遁臣等父子及家士唯嚴刑是待独至一國人民与家臣老幼婦女則未初知一事伏願寛赦不敢戮実為幸多重不勝哀訴之至因兵器鉄砲悉具以悉之下吏臣父子速出城帰降退閉居某寺門以待典刑耳伏惟聖朝大仁天覆地載幸蒙破格之寛典是謂生死肉骨非敢所望也誠恐誠惶頓首々々再拜

戊辰

九月

松平容保上

会津藩公の謝罪文の起草者は、秋月だと言われているが、はっきりと断定できる材料はこれまで無かった。会津藩側の記録には出てこないこのエピソードは、謝罪文を含めて何時どのような形で降伏の準備が整えられたかを具体的に教えてくれるのである。

十四

その後の経過をたどつておこう。会津藩の三人が、謝罪書を齋藤に預けたので、齋藤は参謀の元に届けた。参謀はこれを受け取った。その夜土佐藩の本営から呼び出しかかった。当初三人が一方の囲みをして入城することを許可したが、薩摩藩から三人が堂々と行き来しては士気に関わるから、夜にこっそり入城させよとクレームがついた。そうしたいというので、齋藤等が異議を唱えた。当初の案を伝えると三人は非常に喜んだ。今そんなことをしたら、うまくゆかない恐れがある、当初の案でお願いしたい。そこで土佐藩では薩摩の陣営に出掛けて掛け合い、元の通りとした。二十日になって、三人は、甲賀門より再度城内に戻ったが、その時には米沢藩の衛士九人が護送していった。

この辺りのことが会津藩側では次のように記されている。

九月十九日、手代木直右衛門、秋月悌次郎兩人を、米沢の陣に遣

る。米人嫌を避け、之を土州の陣に通送す。兩人入りて降伏を陳請す。参謀をして城を開き兵器を収め藩主父子軍門に降することを受け日を刻して二人を還し、止戦の令を伝ふ。輒ち命を奉し、降旗を樹て、使を馳せて城外各処の將士に降伏の状を報じ、官軍に抗せざらしむ。(『会津藩庁記録』六「盤錯録」)

また、土佐藩の『山内豊範家記』には、

同十九日、会藩手代木直右衛門、秋月悌次郎、桃沢彦次郎等、米兵ノ長倉崎七左衛門ニ依り、開城降伏ノ儀ヲ我本營ニ乞フ。

とあり、事情は明白である。この結果、九月二十二日の開城式となった。

開城式の次第を、『会津戊辰戦史』によって確認しておこう。

巳の刻を過ぐる頃、陣將梶原平馬、内藤介右衛門、軍事奉行添役秋月悌次郎、大目付清水作右衛門、目付野矢良助は礼服(麻上下)を著け、草履を穿ち、城を出て甲賀町通の式場に至る。午の刻(正午)頃、西軍の軍監中村半次郎、軍曹山県小太郎、使番唯九十九は甲賀町に来る。

秋月悌次郎は小白旗を持ち、鈴木為輔、安藤熊之助を従ひ(兩人、羽織袴を着く)、慇懃出て之を迎ひ、先ちて式場に導き、重臣以下の名札を出し開陳して日く、

押付主人罷出、御直に可申上、先以私共儀為御出迎罷出候。

清水、野矢、城中に入り、出城の時期なるを報ず。二公礼服(麻上下)を着け、小刀を佩ひ、草履を穿ち、大刀は袋に入れ侍臣をして之を持たしめ、家臣十人許、礼服(麻上下)を着け、脱刀して従ふ。式場に至り、皆幕外に待す、毛氈と薦とを敷く。軍監中村半次郎、軍曹山県小太郎、使番唯九十九、之に列す。二公、立礼して、恭しく降伏謝罪の書を総督府に上る。——中略——使者唯九十九、其の書を受け、軍監中村半次郎に出す。半次郎、之を受理

す。(中略)是に於て重臣連署して歎願書を上る。——中略——軍監、其の書を受理す。

二公は式了るの後、城中に帰り、重臣將校等を召して其の苦戦辛勤を犒ひ、訣別の意を表し、然る後、城中の空井及び二ノ丸の墓地に至り、香花を供して礼拝し、諸隊の前に至り、一隊毎に辛勤の勞を慰して訣別を告げたるに、三軍の將卒、皆恨を思ひ涙を呑み、仰ぎ見る者なし。

九月二十二日午前十時過ぎ、陣將梶原兵馬、内藤介右衛門、軍事奉行添役秋月悌次郎、大目付清水作右衛門、目付野矢良助は麻上下を着け草履履きで城を出て開城式場に向かう。正午頃西軍の軍監中村半次郎等到着。秋月悌次郎は、小白旗を持ち、鈴木為輔、安藤熊之助を従え、彼らを出迎え式場に導き、重臣等の名前を知らせて藩主到着の挨拶をする。この日、梶原平馬ら、城を出て甲賀町通の降伏式場に至り、新政府軍監中村半次郎らを秋月悌次郎が白旗を持って出迎え、清水作右衛門と野矢良助は城に帰って松平容保・喜徳以下を式場に送り、容保・喜徳は降伏状を提出、重臣一同は嘆願書を提出、いずれも受理される。よく知られた開城式の様子である。この時敷かれていた緋毛氈は、式後秋月が小片に切り分けて、有志者に分け与えた。明治二十三年秋月がつくった「泣血氈」にはその時の感慨が込められている。

開城後猪苗代に抑留された秋月のもとに長州藩士奥平謙輔の書状が届けられた。このことを秋月は直ちに藩の上層部に報告した。藩滅亡の危機に際会した家老以下中枢部のメンバーは、奥平に縋って事態の打開を図ろうとした。例によって動くのは秋月である。返書を携えての彼の北越潜行は、独断でなされたわけでは決してない。同行者には家格が上の小出鉄之助がえらばれた。僧に扮したのは小出、従者が秋月、身分差は厳然としている。奥平に託された会津藩の子弟は、家柄

のよい若者達、秋月が勝手に指名したわけではない。藩内での人選である。彼等は会津藩の再興を託された人材だったのである。

この項了

二〇一九年五月二十一日